

終刊にあたって

井上円了研究会第三部会代表

高木 宏 夫

(東洋大学社会学部教授)

井上円了研究会第三部会は、井上円了記念学術振興基金の研究助成金を得て、昭和五三年一〇月に発足した。この助成金は三ヶ年で終わったのであるが、一年の休止期間を経て、「東洋大学百周年記念に寄与すること」が期待されて、さらに四ヶ年間の研究助成が運営委員会によって決定された。そして三つに分かれた各部会別の研究の総合化を昨年度とし、今年度は全体の総合研究ということで、昭和六一年一二月に一切の研究を一応終了し、報告書を提出することが定められ、この第六号の座談会がこれに当たるのである。

共同研究を始めるに当たり、1、不完全な資料を補完するために予算を重点的に使うこと。2、資料を情報として共有し、研究会の報告も、タイプオフ等(当時はコピーの機械は普及していなかった)のなんらかの形で公表し、研究会内外の批判と意見をいただくための措置を講じる。3、井上円了の時代の諸条件に位置付けたいうえでの研究を行うことなどが確認された。この号をもって最後とする『井上円了研究』はこの第2項の発展したものであり、資料篇は第1項に当たるものである。資料篇は、コピー機械の普及にともなつてその性格を変え、近く公刊される『井上円了文献目録』を最終号としている。なおついでにお断りしておきたいのは、『井上円了研究』は研究報告のテープ起

このまま印刷にした形の研究メモ的性格が強く、その論文化されたものは、昭和六二年一〇月の百周年記念出版の論文篇の一冊にまとめて刊行の予定である。

第三部会の研究会は昭和五三年一月一三日を第一回とし、同六一年一月一七日の第三四回研究会をもって終わり、この間4回にわたって、二泊三日の合宿研究会を行った。その詳細は雑誌に記載した通りである。

第三四回研究会は研究会の組織解散に当たっての総括会議も兼ねて行われたので、その要点を簡単にまとめると、つぎのような点にあった。

1 第三部会の研究は、その時代の諸条件の中に位置付けた客観的な立場に立ったもので、研究はその緒についてばかりである。

2 他の部会との総合討議ができなかったために、研究分野と視点に限定性がある。

3 研究はどちらかというと基礎研究が中心であった。そのため多くの研究が残されていて、むしろ問題提起に終わった観がある。

4 井上円了の後継者についての研究が大きく取り残されている。また社会教育活動の分野の研究もきわめて不十分である。

以上のような反省点の指摘があつて、今後の問題としては、きわめて多くの分野が取り上げられたのであるが、その中の主なものをつぎにあげておきたい。

1 この研究の継続ないし継承が必要であろう。むしろ、永続的研究機関があつてもよいのではないか。

2 過去の五〇周年と八〇周年に資料を集めたが、それが散逸している。百周年では、遺品を含めて、資料収集・展示をするところを作ってよいのではないか。

3 その資料を外部にどのような提供できるのかの検討が必要。

4 マイクロフィルムによる文献資料以外のコンピュータに入力した文献目録その他の資料を今後使える形かどうかを保管するのか。

5 図書館にただ所蔵されるだけの、物件としての資料にならないように、その扱いをどうするのか。

等々、さまざまな意見が出され、助成金はなくても有志で今後も研究を続けようという提案もあつた。第三部会で刊行した出版物にともなう残務や、資料の所蔵のために、残務処理委員を残し、必要経費を有志拠出でまかなうことが決議された。

以上経過報告をもつて、終刊の挨拶に替えたい。